

芥川だより

発行日***2017年10月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

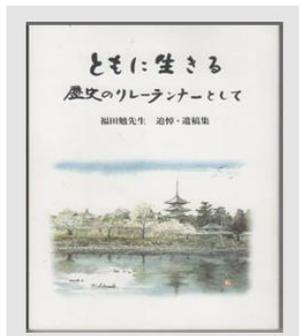
高槻市芥川町2 - 1 4 - 3

TEL 072 - 681 - 8870

梵

***** 一部100円です *****

一冊の追悼・遺稿集



先日、飲み会で友達から「これを買ってくれと」頼まれて自費出版の本を買った。半年前から彼が熱心に資料集めや編集をしていると聞いていたので、断る訳にはいかなかったのが本音であったが、読み始めてこれは凄い本やと思い一気に読み通した。

表題は「ともに生きる」歴史のリレーランナーとして（福田勉先生 追悼・遺稿集）203 ページ。大阪府立天王寺高校在学中に担任であった福田勉先生を偲んで作った本である。先生は世界史を担当されていて、いつも教科書を脱線し歴史学者としての世界観を教えられた。その教え子たちの幾人かは社会運動家になり、多くは教職に就いた。

先生なくして今の自分はないと多くの方が追悼文に寄稿されている。

私は一読して「エライ先生がいたんやなあ」と驚いた。大学なら分かるが高校で、しかも府立高校でこのような先生が定年まで在職されたことが不思議に思えた。京都大学原子力研究所の小出裕章さんの事が脳裏に浮かんだ。小出さんの事を知った時に、さすが京大や懐が深いと感心したが、福田勉先生に関しては、大阪府の教育委員会も懐が深かったのか、教職員の意識が高く団結していたのか、たぶん後者だと思う。

詳しくは書けないが、特に気に入った箇所を抜粋します。～「世界の近現代史を扱う観点として、①諸国人民のそれぞれの要求は何か②その要求は誰によって圧迫されているのか③そして諸国人民は誰とどう闘っているのかをふまえる」ことを通じて、究極にはアメリカ帝国主義の姿を明らかにするように扱うべきです。生徒たちはその中で、中国人民が、現在、直面している困難、課題を考えることができます。～

半世紀前といえば、沖縄問題、大学紛争、70年安保と政治が激動した時代です。その時代に世界的な視野で歴史を日々研究し大阪府の教育委員会からの圧力に屈せず「歴史を創るのは一握りの権力者ではなく名もなき民衆であり、歴史は紆余曲折を経ながらも必ず前進する」という信念を貫き通された。友人が一生懸命になる理由がよく理解できた。発行部数は140部ですが、興味のある方は梵までご連絡ください。1冊2000円です。

死をめぐるあれやこれ (37)

石川 吾郎

偏食(続)

幼いころから、私は肉類が食べられず苦勞をしたことを前回書いた。そしてその原因が、思わぬことから明らかになったのだった。

私が大学生で京都に下宿をしていたころ、夏休みに帰省をして母と何気ない話しをしていた。話しはたまたま私が肉を食べられないという話題になった。と、母は次のようなことを言った。「○○ちゃん、まだ三つくらいこのころ、神社の近くの鶏肉屋(かしわや)と一緒にいたら、急に泣き出して、それから肉を食べなくなったのよ」と。

この話しを聞いたとき、そのときの映像がパッと、私の脳裏に細部に至るまで鮮明に蘇ってきた。幼い私は母の手に引かれて、その鶏肉屋の店先にやってくる。神社前の大通りは明るい光に満ちている。店先には平たい網の容器物に、鶏が幾羽か首を出してケツケツと鳴きながら辺りを見回している。そして次瞬間、外と較べて薄暗い店の中に入ると、カウンターの向こうには、羽根を筆入れ首を切られた鶏の死体がいくつもぶら下がっている、という光景だった。

記憶はそこまでだったが、そこで幼い私は泣き出してしまったに違いない。この映像は確かに幼いころ繰り返して繰り返して反芻していたような気がする。しかし成長するにつれて、いつの間にか忘れられて無意識の闇の中に沈んでいった。それが母の話から一気に私の記憶にわき上がったのだった。

その後、私の偏食がどうなったかと言えば、少しずつ普通の肉ならば食べられるようになっていった。

(裏へ)

まるで精神分析の効果の話しそのままなのだが、これは私の体験そのままだ。もともと偏食の克服については、自分が幼い「万能感」から、「死すべき存在としての自己」という(大人)の認識(Aランボー流に言えば「季節の上」に死滅する者)の一人であること)を受け入れてきたことに関連しているのだろうと今では思っている。

しかし相変わらず私は、フライドチキンは好きではない。

芥川だより二二九号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなで知ろう日本の危機 25	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	3
哲学屋のつぶやき 39	祖蔵哲	4
大峯奥駆道 12	梵店主	7
おっちょこちょいぼけ 53	A O	7
大人の今昔物語 38	石川吾郎	9
B級サラリーマン渡世譚 51	明石幸次郎	10
オクラの山たより 13	困了生	11
わがおくのほそ道の旅 10	成瀬和之	15
米国紀行 10	河原崎成行	16
キャッチー&トレンド	大江雄鬼	18
孫ウオッチング	福田圭	19
編集後記	嘉	19
女90年の軌跡	眞糰	20
俳句	土田裕	20
	影山武司	

(表) 総選挙・主な争点

自民・公明	希望・維新	総選挙 《主な争点》	共産・社民	立憲民主
×	×	森友・加計追及	◎	◎
×	×	陸自日報問題	◎	◎
◎	◎	改憲	×	×
◎	◎	核武装	×	×
◎	◎	集団的自衛権	×	×
◎	◎	沖縄新基地	×	×
◎	◎	共謀罪	×	×
◎	◎	機密保護法	×	×
◎	×選挙用?	消費税増税	×	×
◎	◎	大企業減税	×	×
◎	◎	原発再稼働	×	×
×	◎選挙用?	原発ゼロ	◎	◎
◎	◎	非正規雇用	×	×
×	×	北朝鮮対話	◎	◎
×	×	核兵器禁止条約	◎	◎
×	×	市民共闘	◎	◎

みんなで知ろう日本の危機(25)
伊藤明

衆議院選挙・後戻りできない選択
安倍首相が九月二八日臨時国会冒頭で、「違憲の衆院解散」をするというニュースが流れてからの、九月末から十月上旬の、日本の政治状況の大変化は、目を疑うものがありました。

ここで「違憲の衆院解散」というのは、

さる六月に森友・加計問題の追及のために、野党四党が四分の一をもって憲法五二条に基づいて臨時国会の召集を要求しましたが、安倍政権はこれを無視し続け、今回ようやく臨時国会を召集したものの、審議なしでその冒頭で解散を宣言する暴挙に出ているからです。これは明らかに憲法違反です。

この衆院解散は、安倍氏のモリカケ疑惑逃れ以外の何ものでもなく、北朝鮮の危機を煽って「国難突破解散」などとするのはとんでもないことです。(この「国難突破」という用語は、戦時中に国民を脅し煽動するために、軍国政府が頻繁に用いた言葉だ、ということ)です。これに従わなければ「非国民」として、排斥・差別されたという暗い歴史を思い起こさせるのです)

ここで一連の政治的変動の経過を振り返る余裕はないのですが、十月十日の選挙公示一

週間前になり、ようやく選挙の構図が明らかになってきました。それは、**自公与党勢力と、小池百合子 希望の党 維新「いっしょ」といった改憲推進の野党** 対 **共産・社民に立憲民主党を加えた、改憲を許さない野党連合**、という構図です。

マスコミは、自公安倍政権対小池「希望」の対立を強調していますが、これは国民の判断を誤らせる策略と断言していいのです。安倍政権と小池「希望」は、改憲を強引に推し進めるということで一致しています。小池「希望の党」は政策上の違いは与党とほとんど変わりはなく(これは後で述べる)、維新とともに自公与党の補完勢力に他なりません。

安倍政権への批判を期待して「希望」へ投票することは、結局このまま安倍政権を支える結果になってしまう可能性が大きいのです。あるいは、たとえ政権が変わったとしても、安倍政権と変わらぬ、この国を戦争へと向かわせようとする政権にとって変わるだけなのです。

真に安倍政権に対峙して、これを退陣させる勢力を支持するならば、共産・社民に立憲民主党を加えた、市民連合が支持する野党連合に投票をする以外に、選択肢はない、ということになります。

今回の衆議院選挙で、考慮すべき主な論点と、それに対する各勢力の姿勢を表にまとめて見ました。

◆永遠の嘘を信じてくれ

本日(九月二十八日)、衆議院が解散された。天皇の国事行為を規定した憲法第七条を、衆議院解散は総理の専決事項であると解釈しての解散である。それが日本の政治の慣わしになったのは吉田茂総理以降ということらしい。しかし法律に素人の素老人には、第七条は、日本が悲劇の大きな一翼を担った先の大戦への反省の証しの一つとして、天皇の権限をここに定める国事行為を行うことに限定したものとしか読めない。しかも安倍総理は、まるで手柄のように大見えを切って、この解散を「国難突破解散」と宣言した。前回のアベノミクス「道半ば」解散と同じ手口である。

アベノミクス何年経っても道半ば

「道半ば」は手柄ではなく、世間ではそれを失敗と言うことを知らないらしい権力者が、今度は、

国難の種まき信を問う愚か

を繰り返している。加えて、現時点では解散を巡る政治の動きがどこへ収束するか定かではないが、「希望の党」の立ち上げがあり、それに釣られて市民と野党の共闘路線からいかに抜け出すか、目下(九

月二十八日正午時点 右往左往する民進党などがある。また新党ですか、学問と同様に、政治にも王道はないと思うのですが(注1)。いずれにせよ素老人の下手な川柳の種は尽きません(しかし、私怒ってます)。

日本の政治貫く棒が折れ

心棒がなくて海月になる政治

また新党政界にいる詐欺師たち

また新党結婚詐欺師も目が点に

悪政の化粧直しへ大花火

打ち上げて咲かぬ花火にまた点火

悪政は化粧直しても悪政

ドロドロした世界からの逃避なのかもしれないが、素老人はまた、人間らしい教育の世界を夢見るようになる。だいぶ早いけれども、卒業生を送る言葉。校長は身体を張って永遠の嘘をつかなければならない(注2)。

卒業おめでとう。

いま私は、皆さんの卒業を心から祝福している。しかし同時に私は、いま皆さんが飛びたつ世界が希望に満ちているわけではないことを考える。愚かしくもやりきれないあまたの事実にあふれた世界は、しばしば私たちをどうしようもない不安や絶望にかりたてる。そんな世界ただ中において、人間が学ぶとはどういう

ことか、人間が生きる幸せは何であるかなどと問い語ることは、ほとんど嘘をつくことに等しいかも知れない。

しかし、考えてもみよう。この世界も、この嘘も、いまにはじまったわけではない。人類が、はじめは無意識のうちに、やがては意識的に他の動物と区別して自らを人類と呼んだときから、私たちの世界ははじまり、嘘が生れた。だから、この嘘はただの嘘ではない。世界のはじまりから今日まで、人類の歩みを、それを進歩といわないで何が進歩であろう人類の進歩を支えてきた永遠の嘘である。

誤解してはいけない。人間が求める力と富は、それだけで正義なのではない。力と富は、卑劣で卑怯な支配を生むことがある。自由は、それだけで尊いのではない。自由は、自他ともに認め合わなければ、抑圧を生むことがある。臆病で弱いことが常に悪でないのは、勇敢で強いことが常に善でないのと同じである、と

知らねばならない。それにしても、矛盾に満ちた世界をどうするとか。永遠の嘘は、こう答える。何であれこの世界に存在すること、そこにあることにはそれだけで深い意味がある。その意味に思いを致さなければならぬ、と。地上に存在するものはすべて、互いが互いの一部なのだ。

「人は知らないものを深く愛することができる、しかし愛さないものを深く知ることはいできない」

イギリスの哲学書にある言葉だと聞いた。世界と自己に対して深い関心をもつこと、世界を知り自らを問うことだけが私たちを支える。

人間は、ふつうであること、あたりまえであることが一番美しい。それが嘘にも聞こえるのは、それが一番難しいことであるからだ。

永遠の嘘を信じてくれ。

世界はいつでも不透明で、混沌としている。しかし、先の見えない不安を恐れることはない。先の見えない不安は、先の見えてしまった不幸よりましだと笑ってくれ。夢や希望は、遠くにあるのがい。追いついてしまえば、それはもう夢でなくなる。希望でなくなる。そう思っていればいい。

永遠の嘘を信じてくれ。

ともに学んだ諸君の、幸せな誇りある人生を祈る。

◆伸びられぬ日は、伸びぬなり

私は、皆さんより何十年も長く生きています。長く生きていけば、おもしろいことや楽しいことの幾つかを知ることができる。しかし、それは自慢になりません。そんなことは、皆さんもすぐに知ることにはすぎない。一方、長く生きていても、いやなことや悲しいことが減るわけではありません。これも、あたりまえのことです。

いやなことがあつて悲しくなったとき、

思ひ出す言葉があります。

ぶどうに種があるように
わたしの胸に悲しみがある
青いぶどうが酒になるように
わたしの胸の悲しみよ
喜びになれ

高見順という人の言葉です。ぶどうに種があること、青いぶどうが酒になることの意味を思ったりするうちに、いやなことや悲しいことを、ふと忘れられたりします。
この人は、また、こういう詩をつくっています。

われは草なり
高見 順

われは草なり
伸びんとす
伸びられるとき
伸びんとす
伸びられぬ日は
伸びぬなり
伸びられる日は
伸びるなり
われは草なり
緑なり
全身すべて
緑なり
毎年かわらず
緑なり
緑の己れに

哲学屋のつむやき(39)

祖蔵 哲

死を哲学する②(哲学編)
先月号では人間が古来より「無常」であると感ずる「死」には四つの「不安」という面、つまり、『肉体的苦痛』『離別』『喪失』『死後の世界』があるとということ

を説明し、この「不安」にたいして現実的にどう対応していくのかを語った。最近、流行の「終活」は物理的な「離別」と「喪失」に対する準備と言え、他者との関係の準備でもあり、それが自分自身の「心」に対する準備ともなっている。様々な「物語」や「宗教」はこれも「無常で不合理」な「死」に対して「合理的」な説明でこれを受け入れる「心の準備」である。これによって「肉体的苦痛」を精神的ものに転化させ、それを回避しようという試みであろう。いずれも「現実的」な「死」への準備である。

さて、私たちが今、この「心」といつているものは実は近代に登場してきた「自己意識」のことを指すと思われる。とすると近現代の「心」としての「死」はそれ以前とは違っていたということにもなる。昔の人々は「死」というものをどのように感じていたのであろう。人間の「死」が時代歴史によって異なるのはどのようなことか。同じ肉体の消滅が昔と今とどのように違うのか。哲学的に語る「心」とは実は「自己意識」を

語ることであり、その意味では近現代の「死」というものは「歴史的」な「意識」ということになる。どういうことかというところ、死を知っているのは人間だけであるからである。

動物は自分の「死」というものを知らない。確かに天敵に襲われたり、自然の脅威にさらされると「死」を避ける行動をとる。しかしこれは動物的本能にプログラムされた生命維持機能であり、平常時に自分が死ぬ存在であるとは考えてはいない。動物は自分以外の仲間が死んでいても自分も死ぬのであるとは考えない。しかし、人間は「他者」の死に対して自分の死を「意識」する。つまり「他者」のなかに「自己」を映すのである。自分自身が「死すべきもの」であることを知っているのが人間である。

「死すべきもの」とは西欧では mortal (モータル) という形容詞で「人間の」ことを指す。この mortal はラテン語の mori (死) から来ている。中世でよく語られたメモメント・モリ (memento mori) は、memento は remember、「心に刻む」であるから、「死を忘れるな」という意味になる。しかし、この言葉も歴史によって様々な使われ方をしている。最初に使われたのは古代ローマ帝国であった。帝国は戦争に明け暮れ、何時自分が死ぬのか「死」というのが身近にあった。そこでエピクロスやストア派などの哲学が生まれ「心の平安・アタラクシア」を説い

た。しかし時代が下るとこの言葉はどうせ死ぬのだったら「今を楽しめ」ということになり、享樂におぼれるようになる。だが、キリスト教が国教になると、天国、地獄の救済が重要になってきて贅沢、享樂は現世での空虚でむなししいものであるというものになり「死」が再度「意識」の全面に出てきた。

先月の最後に少し説明した「受動態意識仮説」なるものは、そもそもこの私たちの「心」と思われる「自己意識」なるものが存在せず単なるクオリア（記憶）のための「機能」であるという衝撃的なものであった。つまり、私たちの「楽しい」「美しい」「悲しい」とかという「感情」は現実の一部を「記録」するための「強度」であり、これは「自己意識」が行っているのではなく「無意識」に行われた「結果」なのであるというのである。これによると私たちは「無意識」の奴隷ということになり「感情」は単なる「記憶」を選択するための「強度」となる。この「感情」が私の「心」というわけである。この説を出している人はロボット工学者であるらしい。それもそのはずであるが、このような説は現代の脳科学が発達するに従い「自然科学」的にも証明されているという。

最近の脳科学は私たちの常識を覆すような発見が多いが結論を急ぎすぎのものも少なくない。例えば有名なところでは一八九〇年のリベットによる「運動

準備電位」の研究である。リベットは、人間が腕を動かそうと意志し、腕が動くまでの過程を、電氣的に測定した。A「無意識的な電気信号(脳→筋肉)」↓B「意識的な決定」↓C「動作の開始」という一連の流れについて、AとBの間に〇・三五秒、BとCの間に〇・二秒の時間差があることが示された。この実験の意味するところは私たちが腕を動かそうと「意識」する前に脳は筋肉に動作の指令を出しそれを拒否できるのは〇・二秒しかないということである。つまり私たちは「意識」はものとしての「脳」の奴隷になっているということである。哲学的には人間の「自由意志」は存在しないということを示している。「受動態意識仮説」もこれに則する説明である。

このように「三人称、二人称の死」と言われる「他者」のものではなく、「一人称の死」自己自身にかかわる死にはこの「心」「自己意識」が大きくかかわってくる。ここでいう「自己意識」は哲学的なものである。一方では「心理学的自己意識」なるものがあるが最近のそれはいわゆる脳科学の影響を受けてか、実証主義的なものに変貌しており、私から言わせると「自然科学の婢女(注…差別用語)」になっており本質的な学からは日々離れていっているように思われる。さてそれは置いておいて、しばらくは西欧哲学が「死」をどのように考えてきたのかを遡って見てみよう。

前回にも少し話したが古代ギリシアのソクラテスは「哲学は死の練習」であると言っている。この思想は、ソクラテス以前のピタゴラス派の輪廻転生や魂の不死という点にかかわる。ご存じのようにソクラテスは釈迦と同じように自分自身では書物を一つも残さなかった。そこでこのソクラテスの思想はその弟子のプラトンが語る。ピタゴラス派はオルフェウス教という東方の民間信仰を通じてその思想を受け継いだようだ。その場合の「死」とは「魂が肉体から離れること」だった。ソクラテスにとって「魂(心)」とは「自己自身」、「真の自己」のことであり、逆に、「肉体」とはそうした真の自己とは異なるもの、自己の「付属物」、「飾り」にすぎないものだったということである。だから、魂が肉体に入ってくることで、つまりこの世に生まれてくることは、魂が自分にとって飾りに過ぎない「衣装」を身にまとうことであり、逆に、魂が肉体から離れること、つまり「死」とは、飾りである衣装を脱ぎ捨てることだった。こうしてあなたも何度も衣装を取り替えるように肉体を取替え、魂は永遠に生と死を繰り返す。

しかし、このように輪廻転生を繰り返している限り、魂はたとえ一度肉体を離れ、真の自己自身に戻ることができたとしても、再び自己の付属物の中に入ることなければならぬ。それは真の自己ならざるもの、魂の墓場に結局は戻ってこ

なければならぬようなものである。だから、魂はなるべくその墓場から外に出て、自分自身だけになるようにつとめなければならないし、魂が本当に求めているのは、その魂が各々の時に何に目を向けているにせよ、魂だけになって暮らすことである。

これがつまり輪廻の輪から脱け出すこと、解脱であった。魂は、本当はこの解脱を求めている。だから、肉体の中に入っているときにも、なるべくその状態に近づけるようにすることが魂にとって本来的な活動であり、そうすることで幸福に近づけることができる。このあたりはヒンズー教に対する仏教の立場と似通っています。さて、ではその「解脱」が、つまり、「永遠の死」が、あるいは、より正確に言えば、なるべくその「永遠の死」へと近づくことが、なぜ「哲学」なのだろうか。これが西欧「哲学」という言葉の語義、「愛知」の精神と密接にかかわっている。すなわち、哲学という言葉はギリシア語の「フィロソフィア」の訳語であり、そのフィロソフィアとは「知を愛すること」、「知を求めること」だった。タレスやアナクシマンダロス等、いわゆる自然哲学者の場合には、それは宇宙の理法を探求しようとする知、自然現象についてその何たるかを探求しようとする知であった。だが、ソクラテスの場合には、そうではない。ソクラテスが求めたのは、自然現象についての知ではなく、

「真善美なる事柄」についての知、幸福についての知、人間いかに生きるべきかについての知であった。人はどうすれば幸福になれるか、その答えを求めて探求活動を行った。それがソクラテスについての哲学だったのである。

ところで、ソクラテスにとって「死」とは魂が魂だけになることだった。死こそが幸福なのである。そしてその魂とは真の自己のことだった。それゆえ、真の自己とは何かを求める自己探求・自己吟味を行いつつ、なるべく真の自己に近づくこと、自己実現を果たそうとすることが、人間にとって幸福に近づくということである。簡単に言えば、「哲学とは、自己をできるだけその付属物から引き離し、真の自己になろうとすることである」と約言できるかもしれない。これがソクラテスの言「哲学は死の練習」ということの意味なのです。賄賂や脱走が可能であるにも関わらずソクラテスが死刑宣告を受け入れたのはこの「哲学」を証明するためである。

さてここでソクラテス以前のギリシャは「死」をどのように考えていたかだが、これは全く世界が異なる。いわゆる「ギリシャ神話」の世界である。「死」は地下の国にあり暗黒で忌むべきものの汚らわしいものであった。そのような意味では日本の「古事記」の世界と共通性がある。だから、「死」はこの地下に埋められ得るだけ触れないようにして人々は地上の

享樂を賛美していた。哲学が生まれたのはこの後のことである。

さて、プラトンの弟子のアリストテレスは『理性は、不死である。精神的現象のすべてが肉体に依存している。人間が存続するのは、他の生物と同じように、ただ自分の子孫のなかで生き続ける限りにおいてである。』として「心」「魂」を肉体的なものから分離しそれを人間の「理性」としています。さらに先ほども言ったようにローマ帝国時代になると、エピクロスは「死は、われわれにとつて、なにもでもない。なぜなら、善も悪も、すべての感覚のうちであり、死とは、感覚が奪われることだから。知識は、それ自体が目的ではなく、「魂の救済策」である。心の平静を乱す主要な障害は、死の恐怖である。」として「魂」や「心」は感覚として存在しているだけで本質は「身体」のほうであるという一種の「唯物論」的に「死」の現象を捉えています。そして中世になるとキリスト教思想が神の意志による「救済」と「天国」での復活を説いた。この時代は「自己」というものがなく、全ては創造者である「神」のものという考えである意味「不安」「喪失」から人間は解放されていたとも言える。しかし、一五世紀に入ると大航海時代がはじまり植民地をめぐる戦争や病原菌による災害が多発し「神」の存在に疑問を抱くようになる。そこで「個人」「自己」というものが再認識されるようになる。

一七世紀、それを代表するのがデカルトである。有名な「我思う故に我在り」という言葉は「考える私」というものを疑いのない「確実」なものにして、この「確実性」から全てを引き出そうとしたのである。しかし、デカルトはまた、その「確実性」を保障しているのは「神」であるとはしていたのだが。そして、物である「身体」を「こころ」である「精神」を分けた。これが近代的思考のはじまりである。それ以前は物に精神が宿っているとして万物はある意味神聖なものであったのだが、デカルト以後、物は単なるものになった。それゆえ、自然科学は物に對してなんの遠慮もなく裂いたり刻んだり出来るようになったのである。デカルト以後スピノザやライブニッツなど自然と精神の一体化を説いた哲学者もみられるが、カント以後ヘーゲルまでのドイツ観念論哲学は「死」をいうものを「感性対理性」という「思弁」の世界のものとして扱うようになった。一九世紀になって、「死」の問題を「生の目的」として最初に考えたのがショーペンハウワーである。『死こそ、哲学に靈感を吹き込む真の守護神もしくは詩神である』『反省的な理性』は、死の恐怖に對する抗毒剤を、宗教や哲学の形でうみだしている『自殺は、意志を強く肯定する現象である。自殺するものは、生きたいと思っているのであり、ただ、自己の生の境遇に満足していないだけである』『死』を「生きる」

ことの「意味」を問うものとして「対立的」に捉えている。さらに一九世紀末のニーチェになるとそれは徹底される。『生の意味は、生の外にはない。生は、それ自身が目的であり、目標である』『有限な人間のはかない存在性を永遠化することを願った』『神は死んだ』ニーチェにとつて「生」はある意味「ギリシャ神話」に帰って「享樂」的（バッカス）なものになる。そしてこれは現代につながる「実存主義哲学」になる。実存とは「現実存在」つまり「実在する個人が主観的に知りえる、人間特有の存在の仕方」ことである。個々の人間が「他者」とは決定的に違う自分の「生」を「存在」として生きることの意味を問う哲学である。もともと思弁的哲学に疑問をもち、自然科学のようにもつと厳密な学問を作り上げたといっておもっていたフッサールと言う人が始めた「現象学」から出発している。実存主義といえは一般的にはフランスのサルトルが有名であるが「元祖」はフッサールの弟子のハイデガーという哲学界では二〇世紀最大の哲学者である。

さてさて佳境に入ってきたがだんだんと哲学話が難しくなるので今回はここまですべては現代哲学の「死」を話そう。



梵店主

四時間も眠っただろうか。昨夜の夜行歩行がこたえて足腰が重いが、強行軍を言い出した手前、よっちゃんは弱音を吐けない。寝袋を抜け出して外に出ると、金峰神社の山門が霧の中に浮かんでいた。同じ敷地内にテントを張っていた女性も起きて荷造りをしていたので、軽く挨拶をした。

彼女は、関東から夜行バスに乗ってきたらしい。独りで本宮まで行くという。女人禁制ではあるが、五月三日の大峰山寺の寺開きの前に女人結界の門をくぐり女人禁制の地域を通り過ぎると言う。

しかし、彼女も少し不安があるらしく「もし、寺の人がいたら…」とつぶやくように言った。よっちゃんにとつては、女人禁制は関係ないと思っていたが、女性には大問題だったのである。言葉では女人禁制を聞いたことがあるが、この時に初めて大峰山が女人禁制の山であることを実感した。

彼女を見ながら、よっちゃんは凄いパワーだなと思った。独りでテントを担ぎ本宮迄の奥駈道を歩くのは大変だ。きっとそれなりの訓練をして準備してきたのだろう。熊が出るかもしれない奥深い山々を越えていくのだ。男でも滅多にいないのに。

男だ女だと言っている時代じゃないと

思うのである。実際に奥駈道をどれだけ人が歩くというのか。本宮に少ない人数に達しない。修験者に至っても高齢化が進み歩ける人は少ないだろう。若い人で進んで歩こうなんて人は少ない。

昨今、高齢者の山登りが盛んだが、若い人は少ない。山ガールと称するオシャレな女性も六甲山ではよく見かけるが、それも一部の人達である。戦後、団塊の世代が山に登ったブームと比べても格段に少ない。

今は、流行っている北アルプスの山小屋も早晚衰退していくだろう。外国人観光客が高い稜線の小屋まで登るとは考えられないから。基本的には、登山人口は一気に減少し山道も荒れてくる。山道は少しでも荒れだすと非常にむずかしい道になり通れなくなる。鎖場やはしごの欠損、斜面の崩落などで一ヶ所だけがダメになったら、もう通れない。

これまでは、山小屋の人などが道の整備に努力されて道を守ってこられたが、山小屋の経営が成り立たなくなったら誰が道の整備をするのか。もしも、公的機関でするとしても、ほんの一部しかできないだろう。

そんなことを想像しながら、女人禁制の事を考えると、益々時代に逆行していると思えてきた。何かの本で読んだ事を思い出してきた。仏教が伝来した飛鳥・奈良時代は、国をあげて仏教を広めた結果、男も女も仏教に帰依し、僧も尼僧も

どんどん増えて寺院も増えた結果、僧坊の中で男女の性関係が乱れだし、個別の寺院だけでは、対応しきれず国が対策に乗り出し、「男子禁制」「女子禁制」の寺院に分け、それまでであった官尼制度(僧侶が公務員だった制度を廃止した結果、尼僧の数が激減し男子禁制をしていた寺院もほとんど無くなり「男子禁制」の言葉も消えた。しかし、男の僧は禁止されずに残り結果として「女子禁制」の寺は残ることになった。また、その女子禁制の寺も一部を除き女子禁制をやめて女子に開放した。

しかし、厳しい修行を戒律に持つ修験道系の寺は、女人禁制をそのままにして現在に至っているのである。その一つが大峰山寺である。

まあ、こんな具合で「女人禁制」が残ったのだと読んだ。長い歴史の中で国の政策によって盛衰する寺の事情があったのだろう。

いずれ修験者も絶滅危惧種になり消えていく運命だと思う。そうなれば、「女人禁制」も自然と消えていくだろう。大峯山寺も維持していくのが大変だから、男女を問わずに参拝者は多く来てほしいのが本音だと、よっちゃんは考えた。

ましてや、吉野から本宮までの奥駈道を整備し維持するのは大変だ。登山者が少なくなったら、道が笹や樹木で覆われてしまう。消えた道を復興するのは並大抵ではない。

— 昭和女、どっかい日記 —

ノブナガ様?…の巻

日本史などに何の興味もなく(もちろん世界史にも。ついでに、理科にも算数にも保健体育にも)関心を持たずに生きてきた。しかし、人間、長生きをすれば何が起きるかなんてわからないものだ。

ある日、織田信長ワンプイント歴女となった私は戦国時代を起点に物事を考えるようになった。つまり、こんな具合。本能寺の変から、今年(今年)は四三五年目。本能寺の変で信長が死んだおかげで天下を取れた家康が開いた江戸時代の終わりに黒船がやってきたのは一八五三年。本能寺の変から数えて二七一年目。そこから一〇〇年後に、ワタシ生まれました。何かものすごい年寄りのように若い人たちに思われそうではないか。ペリー来航からたった一〇〇年しか経ってないとき(そうだよ、そういうアンタだって、一四〇年目ぐらいに生まれてるんだよ。「歴史、身近」と感じられるのは、すべて信長様のおかげだ。

昨今の信長様ブームはゲームから火が付いたらしいが、ペリー来航から一〇〇年しか経っていない時に生まれた私には無縁の世界。昭和のころ、会社の近所の喫茶店にインベーダーゲームという創世記のゲーム機が設置され、それなら打ち興じた覚えがある(こういう表現がペリ

ー来航一〇〇年目生まれならで)。店の奥のテーブルに嵌め込まれていて(上は厚いガラス板で、コーヒーなどを置く)、一〇〇円入れているピコピコと現われるインベーターを消していく遊びだ。当時、勤めていた会社の先輩が「お前なあ、新しいコトは何でも自分でやってみなアカンねんデ」と言っていて、仕事をさぼってピコピコ。私もピコピコ。一〇〇円玉はあつてなく消えていく。大してスリリングなゲームではないのだが、やり始めたから止まらない。思えば、アレが現代の戦国ゲームの走りのハシリであったのだ。私は先輩に比べたら、十分の程度の投資しかしていない(手が遅いのと、ケチなのとで)が、それでも無意味に費やした一〇〇円玉が信長様人気の道を開いたのだと思えば感無量である。(多分、違うと思うけど)。

信長様はいまやTVを付けければ出てくる人気者だ。戦国ゲームのパッケージの信長様はどう見ても外人顔で、「シャアーツ」とか言いそうな雰囲気だが、TVのCMに出てくるのは、しょうゆ顔の、ちよつとマヌケなお人よしというイメージ。「人生五十年」と舞いながら、「いえいえ、これからは人生二〇〇年の時代、そんな保険が必要ですよ」と言われて、うんとと頷いていたり、何年か前には血圧を下げる胡麻麦茶の宣伝で、「ワシも相当短気じゃから、血圧も心配じゃ」てなことを言っていた。また別のCMでは、温

泉の奥に、ちよんまげのおっさんが浸かっているのだけれど、その風貌、明らかに信長様。はつきり言っていて使われ放題。

私は死んだらぜひ、信長様に会って、「この事態、どうお思いですか?」と聞いてみたいものだと思っている。「ふんつ」とギロリと睨まれて斬り殺される気がするが、まあ、こつちももう死んでいるので平気だ。

死んでいるといえ、信長様で羨ましいのは死後、秀吉が執り行ったという葬儀。棺(丸い桶のような形)の織田木瓜紋が悲しく揺れ、その後長い葬列が続く。「あの棺の中は空っぽ。骨のひとつもかけらさえ入っていないのだ」という事実を照らせば、一体どこが羨ましいのだと思われそうだが、私は妙に羨ましいのだ。私だつて、今日明日のうちに死ねば、母親もいるし、姉夫婦、弟夫婦、甥っ子夫婦、若い甥っ子たちに姉夫婦の孫たちもいるので、簡単な葬儀ぐらいはしてくれと思う(私が貯めたお金と保険金で)。友だちや、仕事先の仲間の何人かは来てくれるだろうし、業界紙という仕事柄、化粧品メーカーの広報担当者の一人や二人は弔電をくれるかもしれない。でも、仕事を辞め、母が死に、姉たちが先に逝き、と年月が流れたら?

やっばり、信長様の葬儀は羨ましい。無意味に盛大で、しめやかで、「ひとつの時代が終わった」感がある。稀代の英雄の葬儀たるもの、ああでなくっちゃ。

と、まあ言っても、実際はどうだったのか、わかったものではない。一説によると、信長を滅したのは明智光秀ではなく、秀吉の陰謀という説もある。

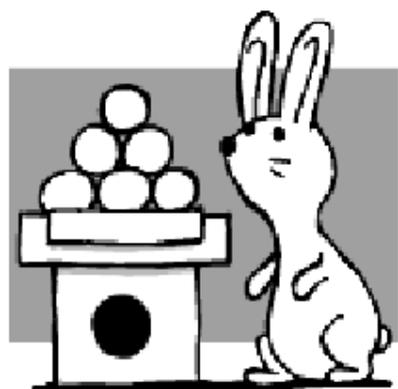
仮にそうだとしたら、につくき敵に、いけしやあしやあと葬儀を仕切られて、いわば偽装工作をされているようなものである。信長様のお怒りはまさに死んでも死にきれない、血圧三〇〇超えの世界だ(死んでますから血圧はゼロですが)。

葬儀というのは、死んでからの儀式だが、信長は実は生きていて、現代にタイムスリップしてきている、という設定のドラマをこの間、見た。深夜枠で、大河ならぬ「小河ドラマ・織田信長」。信長を演じていたのは、NHK「はるが来た」で確か二番番頭の役をしていたおっさん(すみません)。なにしろ、番頭さんの下の番頭役をやるような人なので、顔もスタイルも普通のオツチャン風で、その信長がAD助手として信長ドラマを作る、という設定。ちなみにそのドラマのなかの信長役はお笑いのロバート秋山。

これについても、ぜひあの世の信長様に感想を聞いてみたいが、私は深夜に一人で笑い、突っ込みを入れて楽しんだ。だつて、タイムスリップしてきた信長様が言うのだ。「僕はあんな服は着たらんツ」。服って言わないだろう。ハッピーターンを初めて食べて「美味じゃーっ」と叫んだり。ハッピーターンは私も好きだが、あれは添加物の味が満載だ。添加物

に慣れた現代人の舌にはおいしいが、戦国の人には「?」だ。もつとも、信長は外国から来る珍しいモノや新しいモノが好きだったというから、案外、ハッピーターンも好みの味だったかもしれないが。かように民放でもNHKでも信長、ノブナガ。本屋では相変わらず信長本が増殖している。おかげで、私の信長熱は冷めることがないのだが、ただ、私の妄想のなかの信長様はもつと孤高の人で、海のような広がり静けさを感じさせ、心の底にはさみしさと悲しみを秘めていて、万一、ハッピーターンを口にしたら、ちよつと顔をしかめて、「これは妖しい味がするゆえ、毒ではないにしても、あまり、たくさん食すでないぞ」と私にだけ言うてくれる、そんな人であつてあらまほしい。日本には八百万の神様がいていられるが、同じように八百万の信長様がいるのかもしれない。

(AO)



今回は、珍しい婿入りの話しです。教科書に出ない度は二／五。

世に隠れた人の婿になる話し

(第二九卷 第四)

今は昔、某という人がいた。両親は亡くなり「これからどうやって暮らしていこうか」と思いあぐね、妻もいなくなったので「経済力のある嫁がいればなあ」と嫁探しをしていた。「親もなく、一人で裕福に過ごしている女がいますよ」と、人が教えてくれるので、その女に尋ねを出し求婚すると、女は承知をしたので、この男、女の家に会いにでかけた。

女の家を見ると、その造作は立派で理想的、人の出入りは多くにぎわっている。使う女房も年配から若い者まで七八人ばかりいる。着ている物も皆それなりの見苦しくないもので、召使いの女なども若々しく活気のある者たちが数多くいる。また、どこから持ってきたのか分からないが、その男の装束や小舎人童の着物など大変いい物を着せてくれた。

牛車なども思うままに使うことができ、不足するというものもない状態であったので、「神の助けだ」と、男は喜んでた。妻は年のころ二十歳ばかりで、容姿は美しく、髪も長く「あちこちの宮仕えの女房たちと比較しても、これほどの者はいないだろう」と、あれこれうれしくなってしまうと、妻の元に毎夜通い詰めた。四五月経つてくると、妻は懐妊して、苦しそうな様子が三月ばかり続いた。昼間には年長の女房が二人付き添い、腹をさすったりかいがいしく世話をしている。男も「出産の際は危険なのだろう」などと、産まれる前からあれこれ心配しながら、横になつていよううちにこれまで付き添っていた女房たちが一人ずついなくなり、だれもいなくなつた。男「自分がこうして横にいるので、気を利かせて二人にしてくれたんだろう」と想像していると、北面から何者かが入ってきて、襖障子を閉めた。

そのうちに思いがけぬ方向の襖障子が開いたので「何者だろう」と、そちらの方向を見やると、紅の衣に花蘇芳染めの水干(簡易的な着物)の、重ねた袖口が出ていたので、「これはどうしたこと、そこにいるのは誰なのだろう」と思いあぐね、覗いている顔を見ると、髪を後ろにまとめて烏帽子もしないで、「落蹲」という舞の人物のように異様な風体に見えたので、驚きあわてて「これは昼強盗が入ってきたのだ」と、枕元に置いた太刀を手に取り「あいつは何者だ。誰か来てくれ」と大声で叫ぶと、妻は衣を頭からかぶって汗まみれ

になつて伏せている。

この叫ぶのを聞いて、この落蹲に似た者は、さつと近寄つてきて、曰く「お静かになされ。私はあなた様が恐れるような者ではございません。この姿を見て恐れられるのはごもつとも思いますが、事情をしかとお聞きになれば、哀れと思し召すことにもなります。ですので、まず私の話しをお聞きたいので、ご判断願います」と、涙を流してさめざめと泣く。するとこの妻も泣いている気配なので、男はともにも不審に思い、居住まいを正して心を落ち着かせた後で「これはどういうわけですか。かく言うおぬしは何者か」と。内心、盗人が物を盗りにきたか殺しにきたかと思つたが、さめざめと泣くのもおかしいと思うが、この者の言うには「申し上げるにつけても、申しがたく存じますが、さりとて申し上げぬわけにはいきませぬので」と。さらに「あなたさまが連れ添つておられる方は、私の一人娘でございます。母親はもうおりませんので、どなたかこの娘を可愛がっていただけの方が、と思いつつこうして住まわせておりました。添い遂げられるのは難しいと存じ、これまで私のことはお知らせいたしませんでしたが、娘が懐妊いたしましたので、あなたさまの一方ならぬ志をお持ちとお聞きいたしましたので、隠し続けてもい

ですべてを申し上げます。このようにお目に掛かりましたからには、一安心をいたしました。このような者の娘だとお知りになり、もし万一娘を疎ましがり、離れようとなさるなら、無事で生きていられるとはお考えになさるよう。

逆にもし、お心変わりをなさらず娘と添い遂げていただけられるならば、これよりあなた様にはご不自由なく裕福に暮らしていただけます。ただし私の娘ということとは、誰にも口外をなさらぬようにお願い申し上げます。私は今日以降、二度と姿を見せぬつもりでございます。またこれから差し上げます財産は、私のような者の差し上げますものなので、他に持ち主がいるのではないかとのご心配はご無用でございます。もし召す分だけだけでもご自由にお使いください」と、倉の鍵を五つ六つ取り出して前に置いた。また「近江の国の知行をいたしております権利書でございます」と、文書の束を三つばかり取り出して置いた。

「今後は二度とお目に掛からぬつもりでございます。が、もしも娘をお捨てになるようなことがあれば、必ず現れるつもりでございます。そうでなければ、影のように沿い続けるだけでございます」と言い残して、姿を消した。

男は、これを聞き驚き、どうしたも

のかとあれこれ考えを巡らす、その様子を見て妻がさめざめと泣き出すので、男はそれをなだめながら、内心「ともかく命がいちばんだ。もし逃げようとすれば必ず殺されることになる。世間に知られぬ者に常に監視されているのでは、とても逃げられないだろう。命も惜しいし妻も愛しいのだから、こうなる運命だったのだ」と、覚悟を決める。また「今後行く所々で、人がひそひそ話しをしているのを見ると、この秘密を話しているのではないかと疑心暗鬼になるだろう。こんなことは耐え難い」と考え、思いは千々に乱れるが、とにかく命は惜しいのだから、ひたすらここにすることにしようと思心をする。

* * *

さて、受け取った藏の鍵で、言われたままにその藏を開けてみると、財宝が藏の棟の高さまでぎっしりと詰まっている。これを思うままに取り出して使った。また近江の領地も、すべて自分のものとなったので、贅沢に幸せに暮らしていた。

そんな日の夕暮れ近く、たいそう美しい用紙に書いた上申書のようなものを、ある人が持ち来たって置いていた。何事だろうと開いてみると、仮名まじりの文で以下のように書かれている。

「怪しい姿をお見せしまして後、去ら

れることなく、藏の物もお使いいただき、また近江の所領も経営していただき、お礼の申しようもございませぬ。私、亡くなることになれば、あなた様の守り神になる所存でおります。私は近江の国の某という者でございます。私のところは思わぬ者にはめられ、頼もしいところを見せようと雇われておりました折りに、まさか盗賊をしているものとは知らず、ただ敵を打つものと思っておりましたところ、捕らえられま

したものの、何とか逃れ、命ばかりは長らえましたものの、前科者になってしまいましたので、そういう経歴は人に隠して、すでに死んだ者と世間には思わせ、このように隠れている次第でございます。世間におりました頃には豊かにしておりましたので、京にこの家を造り、いくつかの藏に財宝を蓄えておりましたので、娘をここに住まわせておりましたが、あなた様のように娘を気に入って婿殿になってくださるお方に差し上げようと、鍵をここに持ってきた次第でございます。また近江の所領も私の祖先からの領地でございますので、気兼ねなくお使いいただけます。このように思いのままにお暮らしいただいておりますのは、かたじけなく感謝を申し上げます。」と、細々と書き付けてあるのを読み、そうだったのかと、男は合点した。

* * *

その後は、男は藏の財宝を使いながら、また近江の領地を経営して、裕福に満足して暮らした。それにしても、ちよつと一緒に住むには不気味な妻なことだ。

後になって、世間に事情がもれ伝わったのだろう、このように語り伝えられていることだ。

《コメント》

なかなか珍しい婿入りの話しです。男としては、申し分ない話しのように思いますが、監視されているという不気味な立場に、心理的に堪えられるかどうかは問題になると思われます。ましてや当時は一夫多妻が許容された社会だったわけですから、財力もちながら、一人の妻を貫くことができるのかどうか。浮気をして妻から離れるようなら殺されるという状況で生活をして、人ははたして幸せか。男は自由を求める日が来るのではないのか？・・・というようなことを考えてしまいます。

B級サラリーマン渡世譚(51)

明石 幸次郎

明石のT畑さんに対する逸話などは、大した事では無いとしても、この時の教訓は“仕事では専門的な知識を持つていれば、その使い方、自分の状況を多少でも有利な方向にもって行ける。又、逆もあり得る”ということであった。

宴会も終盤に差し掛かろうとしていたので、「N川君、K村さんが、韓国に行く前には、H川さんの話を聞いておけ！」と言われたが、白髪のH川さんは、赤ら顔の酒の強そうなあの人かなあ？」と、念の為に確認して「H川さんは、五〇回以上も韓国に行かれていますと聞いたが、売り上げは、相当上げられているの？」と聞いたところ、あの方です。今、担当されている船舶の本機(製品本体のこと)は、数年前に撤退してしますので、クレーム処理とアフターパーツの売り上げが年に数百万と言う位と聞いてます」と応えた。

一瞬、明石はそんな少額な売り上げで、何回も出張して、採算が合うのかと思いついて「クレーム処理がまだ続いているから、出張されているの？」と問うたら、N川は「いや、クレーム処理は二年前に終わっていますね。でも、何故ですか、二〜三か月に一回は出張されていますね？難しい相手に、数億円も掛かったクレームを、上手く処理した功績で出張されていると言うことらしいです」と、詳しくは、N川も知らない



らしく、明石は営業の出張は、色々な理由があるのだらうとかと想像して、いよいよH川さんの韓国に対する仕事ぶりに興味湧いてきた。「N川くん、ちよつと、H川さんに挨拶をしてくるわ」と言つて、明石はビール瓶を持って、若い部員とビールの入ったコップを片手に談笑している、H川さんの前に座つた。

「失礼します。はじめまして。この度、堺工場から、異動で参りました明石と申します。韓国を担当することになりましたので、宜しく願ひします」とビールをH川さんのコップに注ごうとした「待て待て、韓国ではコップに残っているビールをまず、空にして貰つてから、相手に敬意を称するため、左手を右腕に添えてビール瓶を空のコップに注ぐものや。これが、あの国のマナーや」と言つて、残つていたビールをグイと飲み干すと「よし、俺が韓国式で注ぐから、君がグイと飲み干してから、俺が返盃を受けよう」と明石に自分のコップを手渡し、韓国式に注いで「さあ、飲み干してくれ」と言われたので、仕方なく、韓国式でコップに注がれたビールを無理やりに喉に押し込んだ。

それから今度は、そのコップをH川に渡して、H川さんに言われた様に韓国式でビールを注いだ。

「よし、そうだ」と言つて、ビールを飲み干して、又、明石に空になったコップを渡し、「このようになあ」と言つて、繰

り返し韓国式を上演？してくれた。又か、と思ひながら、今度も無理やりに飲み干した。「よし、その調子でお互いに何回か、酒を酌み交わすと、相手と腹を割つた関係になり、商売の話し合いもスムーズに行ふことになる。まあ、相手と酒を飲むことが、まず、一番やなあ。さあ、飲み」と、明石を韓国人と間違えたかと思う位、次から次へとビールを飲まされた。

この人に、どこまで飲まされるか？もう、自分の許容量を超えているので、これ以上は飲めないと思つたが、何でも良いから何か、韓国相手の仕事のヒントを得ようと思ひ「韓国とのビジネスで酒の次に何が大事なんですか？」と何とか酔っ払いながら聞くと「おい、君は、俺とそんなに親しい間柄でも無いのに、それを教えてくれと言うのか？そんなもんは、こんな宴会の場で言える訳がない！」と叱責されてしまった。

結局、ビールをたんまり飲まされた挙句、酒を酌み交わすことが、大事だという事を聞いただけで、これ以上この席に居ても、酒の相手をさせられるだけだと思ひ「失礼しました」と頭を下げて、席を外そうとしたら、「待て、俺の盃を飲めないと言ひのか！」と今度は、日本酒を明石に勧めて、ビールのコップに注ごうとした。ビールをたらふく半強制的に飲まされ、又、今度は日本酒を飲まされるとなると醜態を晒してしまう恐れがあつたので、この場をどう切り抜けようかと思ひながら「いや、もうこ

れ以上飲むのは、出来ませんので、失礼します」と丁重に断つたつもりが、H川も酔つ払っているのか、しつこく「何、貴様は、この俺の酒が飲めないと言ひのか！貴様の様な、酒の飲めない者は、韓国、台湾では、仕事が出来ない！向いていない。無理だ」とまだ、仕事もしていないし、況してや、飲めない酒もビールを立続けに六杯も飲み干した挙句が、君は向いていない。無理だと頭ごなしに断定されてしまった。

明石は、韓国は向いていないと断定されたが、全然酒の飲めない、F田が台湾の担当になつたのは、このH川に言わせれば、明石以上に全然向いていない、無理だ！となるのであろう。それであれば、韓国、台湾、中国は、酒が飲めるか飲めないか、飲めるのも、どれ位飲めるかで担当者を決めたら上手く行くのか？と目の前にいるH川に言つて、反論して、聞こうかと思つたが、何を言っているのかと、酔つ払いに絡まれるように激怒されるのかと思つと、言うのを控えた。

H川のように飲み過ぎて、相手に対し、配慮のない言葉を吐くのは、この様な身内の宴会であれば、酒がそうさせた、本人は悪気があつて言つたのではないと、許されるのであるが、お客さん相手の席、況してや宴会文化が古い韓国では、大きな問題になるのではないかと内心、余計なことであるがH川に対して危惧すると共に、この人も個性的な人の一人だと思つた。

オクラの山たより (13)

困生

若く明るく機知にあふれた定子への敬愛に満ちた「枕草子」であるが、実は筆者の知る限り一カ所だけ定子の深い悲しみとその悲しみを知つた清少納言が「かわいそうな人」と感慨をもらした章段が存在する。

詳しくは後述するが、父親である関白藤原道隆の死後、現実には不遇であつた定子について「かわいそうな人」と清少納言が素直に書いた章段だ。第二二六段「御乳母の大輔の命婦」である。原文の後に拙訳を付ける。

乳母の大輔の命婦、日向へ下るに、賜はする扇どもの中に、片つ方はいとららかにさしたる田舎の館など多くして、今片つ方は京のさるべきところにて雨いみじう降りたるに、

あかねさす日に向かいても思ひ出で上郡は晴れぬながめすらむと御手にて書かせたまへる、いみじうあはれなり。さる君を見おきたてまつりてこそ、え行くまじけれ。

中宮様の御乳母であつた大輔の命婦が日向に下るについて、中宮様から御饞別にと多くの扇をお与えになる。その中の一つにこのようなものがあつた。片面には陽光がともつららかに照つている田舎の風景が描かれ命婦が行く地の官舎が幾棟も描かれてい

る。もう一つ面には京の立派なお邸宅で雨がひどく降っているところに、あかねさす日に向かひても思ひ出でよ 都は晴れぬながめすらむと御自筆でお書きになっているところは何ともいいようのないほどである。こうしたお方を残して行くなど、私には絶対できない。

文中の和歌は「日向の地で明るい太陽に向かっても思い出しておくれ。都では涙の雨が降って心晴れぬもの思いにふけつているだろう」といった意味である。涙を流すのはもちろん定子。「ながむ(＝ぼんやりとする)」「は「うちながむ」も含めて「枕草子」に使用例は四つあるが、悲しみをともなった「ながむ」はこの一例のみである。悲しみに包まれた定子の姿は読者の同情を誘い、ひいては道長にあらざる疑いを受けると極力避けてきた清少納言がここではどうしたことか、「枕草子」でつくりあげた定子像とは違う一面を描いている。

乳母である大輔の命婦が定子のもとを去ったのはいつのことか、史料は何もない。中関白家の没落がはっきりした後であろうとは想像がつく。平安時代の乳母は現代の感覚とは違い、生涯をかけて養子のために尽くすものであった。何といつても高貴な家の養子との縁故は乳母の一家にとって世に出る大きな手蔓だったからである。

その好例は紫式部の娘の賢子(大式三位)である。彼女は十四、五歳の頃から

上東門院(彰子)に出仕し、後に後朱雀天皇の乳母となり、典侍に任ぜられ三位に叙せられた。没したのは永保二年(一〇八二)。享年は八十四歳であった。文学的な名声を除けば母親以上の出世をしたこととなり、女房としては理想的な人生であった。

それはさておき、今、大輔の命婦は定子のもとから去って行くこうとしている。定子の乳母でいることに何の利点もなくなつたと判断したからである。大輔の命婦は撰関家の姫君の乳母である。まず、乳母の出自は清少納言とは大きく変わらず受領階級であろう。夫が日向守にでもなつたことを理由に、沈み行く船を逃れるように定子を見捨てていくのである。この時期、おそらく定子は母親の貴子ですでに失っていたはず。母代わりともいえる乳母すらも自分を見捨てていく辛さを定子はどう受け止めていたのだろうか。そうした心の内をおもてに出すことなく定子は乳母に多くの扇を送った。その一つの扇の片面には晴れ渡った日向の地そして、その裏には京の雨。絵に添えた歌には「思ひ出でよ 都は晴れぬながめすらむと」とある。この歌の内容は通常の別れの歌というわけではない。国守の妻として遠く日向の地まで行く乳母は否応なしに自分を忘れるだろう。しかし、そんなことは分かっている。「私のことを思い出して」と乳母に訴えかける定子。切ない、などといった言葉では言い尽く

せない思いが清少納言の心に沸き返ったに違いない。清少納言の胸は張り裂けそうになる。そして、「このような宮様を都に見捨てて出て行くなんてことは、私には絶対に無理。」と最後の日まで定子中宮にお仕えしようとな彼女が決意する。

こうした思いで定子の死の時まで仕えた清少納言は定子の姿を、「乳母の大輔の命婦」を除いて他の章段では明るく機知に富んだ敬愛すべき女性として「枕草子」の中で描いた。しかし、現実には以前にふれたように夫の母である詮子と深刻な嫁姑問題を抱えていた。また、父親の関白藤原道隆の死後、急速に没落する中関白家にあつて一条帝の寵愛のみを頼りにしたが、「出家した尼で后なんてありえない」と貴族たちから冷ややかな視線を浴び続けた。そして、皇后でありながら撰関家の邸宅に比べればかなり粗末な受領層の平生昌の邸宅で次女を産んだ直後に崩御している。二十四歳の死であった。一年以内に二人の子の出産。体力が持たなかったのではないだろうか。

笑い声にあふれた明るい世界と嫁姑問題そして権力闘争が絡んだ暗い宮廷社会。「枕草子」はその暗部をバツサリ切ったところで成立しているといつてよいのだが、「枕草子」の評価をする上で、この暗部の理解は不可欠であろう。もう少し具体的に定子の悲しみを見ていこうと思う。

さて、すでにふれたように定子の父親である関白藤原道隆は明るく冗談好きな

イケメンであった。人々の間で緊張しきつた空気をほぐす名人だったようで「枕草子」や「大鏡」には多くの逸話が残されている。

この道隆が正妻として迎えたのは高階貴子。当時としては驚くべきことであつた。何しろ関白の長子であり将来は約束されている。正妻は高貴な身分の姫君から迎えるのが常であつた。しかし、貴子は受領層の出身。しかも、父親の高階成忠から学問をほどこされたといえ円融朝の内侍所に勤める掌侍(なまじり)であつた。掌侍といえは宮中の女官の三等官。中宮や女御の私的使用人であつた女房とちがいでいれつきとした国家公務員である。位階も従五位下(男性でも貴族の一員として認められる位階である)以上で、当然ながら手当も国家から支給された。役職をもつた中央官庁の国家公務員と考えれば、まずまずの収入があつたはずである。

人の財布の中身はともかく、貴子は今でいえばキャリア官僚のトップを走つていく女性の一人であつた。だが、この時代にあつては働く女性は蔑みの対象であつた。女主人に仕える使用人であること、働く以上は自分の顔を人目にさらしながら動き回らねばならないこと、など本来は貴族の姫君であつた女房たちにはとても耐えられないことである。とはいえ、宮中で働くことで思わぬチャンスが訪れるかもしれない。貴子はそうした幸運を見事につかんだ。「キャリアウーマン貴子、

玉の輿に乗る」を実現したのである。子供にもめぐまれ道隆との間に三男四女をもうけた。

道隆と貴子の二人が築いた家庭は「栄花物語」によればたいそう明るい家庭であつたらしい。そして、貴子は娘たちの心に女性が奥の方に引つ込んでばかりいるのは感心しないという考えをうえつけていったらしい。長年の宮仕えの経験から女性も元氣よく活動するのが一番というわけである。

冗談が好きで笑いの絶えない父親と「才(漢詩文の才能)」豊かなキャリアウーマンであつた母親に育てられ、セレブで明るく機知あふれた女性。それが定子であつたのである。

こうした家庭の雰囲気そのままに定子が自分の後宮サロンを親しみやすい雰囲気となるよう、入内に際して心を配つたであろうとは容易に想像がつく。

ただし、定子のサロンが誰からみても明るく華やかであつたのは定子が入内した正暦元年(九九〇)から長徳元年(九九五)までのことであり、長徳元年四月三〇日に道隆が亡くなると中関白家の家運は急速に衰え、これでもかというほどの不幸がうち続いていく。

道隆の死の一ヶ月前、定子の兄の内大臣伊周は公事撰行(父である関白の代理となつたが、父の死の一ヶ月後、内覧(関白ではないが、関白と職務上同じ役職)の宣旨を受けたのは道長であつた。この

とき一条天皇の母である東三条院詮子が、洪る天皇を一晚中説得して「うん」と言わせたという。詮子の道長びいき、定子周辺の派手な雰囲気への嫌悪は筋金入りだつたのである。これ以後、関白の座を追われて鬱々としていた伊周と道長のあいだでは従者同士の乱闘騒ぎが何度か起き、時には死者が出るほどであつた。

そして、長徳二年(九九六)一月十六日、思わぬ大事件が起こる。伊周と隆家の兄弟が花山法皇に矢を射るといふ事件が起きたのである。

(百練抄)

内大臣とは伊周、恒徳公とは故太政大臣藤原為光のこと。為光邸の前で花山法皇を待ち伏せた伊周と隆家が法皇に矢を射たのだが、ことはそれだけではすまず、法皇の従者二人が伊周らの従者に殺され首を持ち去られた事件である。事の経緯は「栄花物語」に詳しいが、それによると、そもそもの原因は伊周の誤解であつた。

放恣な好色家であつた花山法皇が為光の四女のもとに通つていたが、同じく為光の三女のもとに通つていた伊周が「法皇といえども自分の愛人に手を出すとは許せない」と勘違いしたのである。怒つた伊周は弟の隆家と語らつて「一発、か

ましてやれ」と邸宅の前で待ちかまへ襲撃したのである。矢は法皇の袖を貫通し、恐れおののいた法皇はあわてふためいて逃げ帰つた。意気揚々と引き上げた伊周らのあとに残つたのは双方の従者たち。その間に乱闘が起こつたのである。激しい争いの中、法皇の従者二人が殺され、手柄の証しとして伊周と隆家の従者たちは首を持ち帰つたのである。この時代、貴族には多くの「兵」たちが従者として仕えていた。いったん乱闘騒ぎともなればヤクザ同士のケンカ以上の事態にもなつたのである。

この事件にすばやく反応したのは道長である。事件の起きた夜にはいち早く情報を得た道長は、それを伊周追い落としの絶好の口実とした。しかも、事件直後に詮子の寝殿の下から呪詛の人形までも見つかり、その疑いは伊周にかかった。伊周は大宰権帥に左遷され、弟の隆家も出雲権守に同じく左遷されることになつた。体のいい流罪である。

しかし、二人は朝廷の決命に服せうとしない。折しも中宮定子は二條北宮(四年前に道隆が自らの邸宅の隣に新造した定子のための邸宅。この建設のために多くの小家の住人が退去させられた)に出御していた。この定子を頼りにして、この二條北宮に籠もつたきり二人は出て来ない。時の検非違使別当(今の警視總監にあたる)は硬骨漢として有名な藤原実資。勅命であるとして徹底的な搜索を命

じた。検非違使たちは邸内に押し入り寢室の戸まで破壊し、さらには天井も床板も外して搜索したという。その混乱の中で心を動揺させた定子は落飾した。尼になつたのである。

いうまでもないことだが、天皇の后が尼になるのは軽いことではない。それは后としての正当性を失うということであり、天皇家で日常的に行う神事・祭祀ができないということである。しかも、このとき定子は妊娠していた。后が出家した例はあるが、尼となつた元の後が天皇の子を産んだ前例はない。のちに産まれた子が皇女であつたから大きな問題とならずにすんだが、出家は軽率な行動であつた。兄弟の逮捕、一家の突然の不幸といった事態は大変な動揺を定子にもたらしたことによるのだろう。さらに追い打ちをかけるように同じ年の十月に定子の母である貴子が亡くなる。

しかし、こうした母親の悲しい状況とは関わりなく胎児は育つていく。その年の暮れ、母にも兄弟にも助けられることなく、定子は天皇の第一皇女である脩子内親王を産んだ。ただし、出産は大幅に遅れ「懷妊十二ヶ月」と貴族たちは噂した。慌ただしい中関白家の変転ぶりに心労が重なつたのかもしれない。

長徳三年(九九七)の六月、一条天皇の強い希望により内裏の隣にあつた識の御曹司に定子は遷御する。定子に対する一条天皇の強い愛情を支えにして中宮復

帰への動きを始めたのである。しかし、貴族たちの視線は厳しい。一例をあげれば次のような記録がある。

今夜、中宮、識曹司に参りたまふ。天下甘心せず。彼の宮の人々出家し給はずといふと云々。はなはだ稀有のことなり。「小右記 長徳三年(九九七)六月二十二日の条

中宮とはもちろん定子のこと。「天下甘心せず」とは「世の人々は誰も甘い目で見ない」という意味で、中宮付きの者たちが中宮は出家されてはいないと言っているが、それはありえないことだ、というのである。

この厳しい目はなかなかなくならない。たとえば定子が第一皇子である敦康親王を産んだとき時の記録にも次のようにある。

卯の剋、中宮、男子を産む(前の但馬守生昌の宅にて)。世に云ふ、横川皮仙と。「小右記 長保元年(九九九)十一月七日の条

定子が男子を産んだのは卯の剋、つまり午前六時頃。皇子誕生を祝う言葉はななく「世の人々は中宮のことを横川皮仙といっている」とある。横川皮仙とは皮の衣を着て説教をした有名な僧のこと。ここでは「尼のくせに子を産んだ尼らしくない尼」という意味である。細かいことだが「中宮男子を産む」の原文が「中宮産男子」とだけあり、敬語が一切使われていないのが気になる。無意識か故意かはわからないが、普通であれば「中宮産

男子給(中宮男子を産み給ふ)」と敬意を含んで書くはずである。「定子は尼になったのだから、天皇はかばっているけれど、ニセ中宮なのさ。」というのが、貴族たちの共通の思いになっていたことの反映ではないか、と想像できる。

言うまでもないことだが、定子が尼になった、ならないといった問題とは別に花山法皇奉射事件後、政治の世界は競争相手のいなくなった藤原道長を中心として動いていく。そして、その動きは中宮であった定子に対する扱いにも露骨に現れてくる。

長保元年(九九九)、第二子の出産のために中宮職の三等官(六位クラスで下流貴族)である平生昌たいらなりまさの家に移った。この邸宅のひどさは「枕草子」の「大進生昌が家に」(第六段)で細かに書かれている。

正門である東門は粗末な板葺きの門であったが、中宮定子の輿こしは何とか入ることができた。しかし、女房たちが入ることになっていった北門は門が狭くて牛車が入らず、臨時に地面に筵むしろをひいて、その上を歩いて邸宅内に入ることとなった。生昌邸で働く下人たちの視線にさらされながら歩いた女房たちの屈辱感はいかばかりであったろうか。牛車の横幅は「延喜式」で三尺二寸(車軸の出っ張りも加えると一メートル五十七センチくらい)と決められている。門というよりも勝手口ではないか。かりにも天皇の子の出産

の邸宅である。あまりにひどい。たとえば藤原道長の娘である彰子中宮の出産は道長邸宅である土御門邸でなされた。紫式部が「土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし」と絶讃した平安京の中でも屈指の広さと豪華さを誇った邸宅である。なぜこのようなことになったか。道長の目を恐れてほとんど貴族が中宮の出産のために邸宅を提供するのを避けたからである。事実、中宮を御世話する役所の長官である中宮大夫(平惟仲。生昌の兄。もともと道隆の家司であり急速な出世をしたが、道隆死後、いち早く道長に乗り換えた)は道長との対立の矢面に立つのを嫌って生昌邸への遷御の直前に辞している。では、なぜ平生昌はあえてしたのか。彼は定子の動きを道長へ内通するためにしたという説が有力である。この年の十一月、定子は一条天皇の第一皇子である敦康親王を産んだ。親王を産んだ平生昌邸は短い一時期を除いて定子の居所となり、生昌邸のあった地名から粗末な家ながら「三条宮」と呼ばれた。名称だけは皇后扱いだったのである。

敦康親王を産んだ後、長保二年(一〇〇〇)の二月から三月と八月に定子は一条天皇の今内裏(一条院)に短期間ながら入御している。すでに中宮となっていた道長の娘彰子の里帰りの間をぬっての入御であった。そして同じ年の十二月十六日、定子は生昌邸で第三子の嬖子びし内親王を産んだ直後、二十四歳で崩御している。

後産がうまくいかず座産(当時の出産は座つたままの姿勢で前後から二人の女性に支えられて出産するのが普通であった)の姿のままの死であったと伝えられている。

すでに中関白家の凋落は決定的であり、かつて清少納言とも親しくしていた藤原行成もこのときにはすでに道長寄りであった。しかし、定子皇后の崩御を聞いた行成はひどく動揺して崩御の経緯を日記に細かに書き残し、その末尾を定子の略歴で結ぶ。

皇后諱いみなは定子。前関白正二位藤原朝臣(道隆)の長女、母は高階氏。正暦元年春、入内し女御となる。冬、立ちて皇后となる。年十四。長徳二年事ありて出家す。その後還俗す。……(後に)立つこと十一年。崩るる年は二十四なり。

「権記 長保二年十一月十六日の条 かつて行成は定子を皇后とし彰子の中宮とする「二后冊立」を天皇に進言したとき、その理由を次のごとく述べた。

中宮、正妃といえどもすでに出家入道せられ、神事を勤められず。殊しづなる私の恩あるにより職号を停することなし。

つまり、定子中宮は正式の後であるが出家され尼とされている。天皇家の伝統的な神事を勤められない。しかも特別に天皇の私的な御恩にあずかり、中宮の称号を停止されなさい。だから、ここはもう一人后をたてて、その後に神事

を勤めさせてはどうか、というのが行成の進言であった。

一条天皇はこれを正論と認め了承をした。もちろん、彰子を中宮とするこの進言は道長を大いに利するものであり、行成は大いに株を上げた。ここでおもしろいのは行成がかつては定子の「出家入道」を「二后冊立」の根拠としたのに、定子の死後は「還俗」を明言して自分の詭弁を認めていることである。それほど定子の死の衝撃は大きかったのだろう。この日を境に行成は定子擁護派としての記述を多く日記に残すこととなる。極めて有能な行政マンであり俊敏な政治家であった行成が実はどのような人間であったかを示しているようでおもしろい。

【補足】

「死せる定子、生ける道長をして恐怖せしむ」ということ

「死せる孔明、生ける仲達を走らす」ではないが、定子の死の直後にもおもしろい話が古記録に残されている。藤原行成の日記「権記」

長保二年十二月十六日の条である。定子の死は寅の刻、つまり午前三時頃であった。時をおかず、それを知った一条天皇はすぐに道長を自宅から呼び出した。しかし道長はとても

参内できる状態ではなかったという。

とうのなしのすけ藤典侍という内裏女房に怨霊が取り憑

き、彼は襲われて疲労困憊していたのだ。怨霊は憤怒の形相で髪を逆立てて道長に襲いかかってきた。彼は霊の両手をつかんでやっつと道長は思うのである。この怨霊の正体はい

たい誰だ。長兄の道隆か。それとも七日間

だけ関白となって死んだ次兄の道兼か。道長は自分が権力の座についたのは二人の兄の死によるものであることはよく承知していた。定子の死によって彼らの報復に恐怖する思いが一気に噴き出したのである。定子のパワー、恐るべしである。古記録によると豪胆といわれた道長の怨霊や呪詛に対する恐怖心は尋常ではない。毎日、怨霊や呪詛を恐れながらも権力の頂点にあつて豪胆を装う男。近代小説の主人公にもなれそうでおもしろい。

定子の辞世の歌

定子は三回目の出産を前にしてもはや自分の体力が次の出産には耐えられないと死を予感しており、彼女は遺書とともに三首の和歌を詠んでいた。しかも誰かにそれを託したのではなく、自分の死の床となった御帳台の帳の紐に結びつけていた。何かの物語のような話だが、定子の辞世の歌は勅撰和歌集にも収められているので、当時の人々は定子の実作だと理解したのだろう。まず、一首目は一条天皇に。

夜もすがら契りしことを忘れずは

恋ひむ涙の色ぞゆかしき

(もしもあなたが一晩中かけて固い絆を確かめ合ったことをお忘れでないなら、私の死んだ後に、あなたが私のことを思っ

て流す涙の色を知りたい)

「夜もすがら契りしこと」には唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた「長恨歌」の世界が垣間見えるようである。七夕の夜、玄宗と楊貴妃が天にあつては比翼の鳥となり、地にあつては連理の枝と誓う場面である。確かに玄宗の寵愛を受け栄華を極めた楊貴妃が迎えた悲劇的な死は定子に似ている。

知る人もなき別れ路に今はとて

心細くも急ぎたつかな

(この世と別れ、知る人もいない死の世界へ。心細いことですが、急いでもう旅立たなくてははいけません)

一首目は死を覚悟しつつも寂しさや不安をもちいらした和歌である。実は、この歌と同じような趣旨の和歌が「源氏物語」にある桐壺更衣の辞世の歌である。

限りとして別るる道の悲しさに

いかまほしきは命なりけり

(もうおしまいです。お別れして行かなくてはなりません。その死出の旅路の悲しいこと。行きたいのは、生きたいのはこんな道ではありません。私は命を生きたいのです)

この歌の「別れる道」は定子の「別れ路」とほぼ同意の語である。どちらも旅に関わる語であるが、平安時代にあつて辞世の和歌にこの語が使われた例はこの二例しかない。紫式部は定子の死の衝撃をどう受けとめ、そしてどのように「源氏物語」の中に織り込んでいったか、少し気になる。

煙とも雲ともならぬ身なれども

草場の露をそれとながめよ

(私の身は、煙となって空に上がることも雲になることもありません。でも、どうか草の葉におりた露を私と思ひ見て下さい)

三首目の和歌である。この和歌では当時の葬送の方法である火葬を定子は拒否しており、煙にも雲にもならず草の葉におりる露になるのだと詠んでいる。定子の遺体は火葬にふされることなく鳥辺野の「霊屋」(埋葬の前にそばら遺体を置く建物)に収められた。葬儀は皇后の崩御の際の制度に則つて国事としてなされたのは言うまでもない。

我がおくのほそ道の旅 (10)

成瀬 和之

山中温泉(石川県加賀市)へは、白根が岳(白山)を後方に眺めながら道を進んだ。左手の山ぎわに観音堂(那谷寺、石川県小松市)があつた。この寺は、花山法皇が西国三十三か所の観音堂の巡礼を遂げられた後、ここに大慈大悲の観音像を安置し、那谷寺(なたでら)と命名されたそう。那智・谷汲という霊場の、頭の二字をとつて組み合わせたと伝える。

寺の境内は、変わった形の岩がいろいろあり、その岩山の上には、老松が植え並べられ、茅葺きの小さな堂が寄せ掛けて造つてあり、景色のすばらしい聖地となつている。

石山の石より白し秋の風

(この那谷寺の岩山は、白く枯れた感じがする。今、吹きわたる秋風は、それよりもっと白く寂しい情感をただよわせて、この地を淨化している。)

「石山」は、ここ那谷寺の石山をさす。「秋の風」を「白し」というのは、古代中国で、四季にそれぞれ色を配したことによる。春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒である。「石山」は那谷寺の庭にある灰白色をした凝灰岩の岩山をさす普通名詞だが、有名な石山寺(滋賀県大津市)を

米国紀行 (10)

河原林 成行

さすと考えれば固有名詞になる。芭蕉の当時においては、むしろ石山寺を念頭に思い浮かべるほうが自然であろう土地の言い伝えがあったという。

芭蕉は、二つの解釈を融合して、眼前の石山の白さを賞賛しながら、那谷寺は石山寺に勝る聖地であるという感動も盛り込んだ挨拶の句に仕立てたのではなからうか。(「おくのほそ道」(全角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典))

芭蕉が那谷寺に参拝したのは『曾良随行日記』によれば旧暦で八月五日。太陽暦で十月二十一日頃と考えられる。私が那谷寺に行ったのは、ドンぴしやり、紅葉の真っ盛りの十一月中旬であった。石山寺に勝るとも劣らないのみならず、立石寺(山寺)にも勝るとも劣らない美しさであった。是非この時期に、山中温泉の鶴仙溪とともに行かれることをお勧めする。芭蕉ならば、この絶景をどう表現しただろうか?だが、私には悲しいかな、芭蕉のように、その美を詠むことは叶わない。

那谷寺は、美しい山水画のような景色が広がり、北陸屈指の紅葉の名所である。ミシユラン・グリーンガイド・ジャポン一つ星にも認定されている。



二〇一六年二月一日の第一一九号から始まって本年二〇一七年一〇月一日発行の二一九号までの一〇か月にも及ぶ「米国紀行」も今回で最終回となります。長期間にわたって愛読いただいた読者の方々に心から感謝します。少ないスペースをやり繰り頂き毎号に連載頂いた下村編集発行人及び本「芥川だより」への投稿を薦めてくれた友人の麻田育良の各氏に感謝します。

エピローグ・昼間飛行

米国からの研修生を受け入れ、研修を終了・帰国後招待された結婚式に出席させてもらったおかげで大変貴重な経験をさせてもらいました。「井の中の蛙のカワラバヤシ・サンの目をちよつと開かせてあげよう」という彼女の悪戯っぽい、茶目つ気のある楽しい声がかえってきてきそです。世代も性別も性格も、それに根本的に、お互いの住む世界、国、宗教など、数え上げたらきりがないほど多くの違いがあるのに、ほんの一瞬のふれあいだけで、人生を豊かにしてくれる大切な友人を得ることができました。「こんにちわ」と、気楽に普段着で、「飛行機で」会いに行ける若い美人の女友達のカップルができました。

今日は、今になってみればアツという

間に過ぎてしまった米国旅行を終え、ニューヨーク・ラガーディア空港九時二分発のノースウエスト航空六九便で、往路と逆に、デトロイト経由で関空へ帰る日です。出発が早いので、六時前に、ボルチモアの「ザ・コンフォート・イン」のときと同じように、ルームメードに毎朝と同じく一ドルチップを「ありがとう。バイバイ」のメモとともに残して部屋を出ます。二泊/二人で五四八ドル(約七万一千円)也です。うち、日本への電話代が三〇ドルでした。

豪華なヒルトン&タワーホテルの玄関からイエロー・タクシーでラガーディア空港へ向かいます。通勤のためにマンハッタン島のニューヨーク市街へ入ってくる対向車が、まだ薄暗い早朝であるにもかかわらず少々あるだけで、道は空いており、約二〇分まで到着しました。ここでも、黒人の運転手は「どこの飛行機に乗るのか?」と聞きます。ボルチモア・ワシントン国際空港などと同じように、飛行機会社ごとにエリアが分かれているのです。ノースウエスト航空を利用するのにユニテッド航空のエリアへ行ってしまうえばそれこそ泣きそいです。

マアそんなこともなく、チップを三ドルとはずんで三〇ドルを払うと、運転手は重い荷物をノースウエスト航空のカウンターまで運んでくれました。早目に搭乗手続きを済ませて一安心です。あとは乗るだけです。ニューヨークの空港とは

いえ、さすがに七時では早いとみえて、朝食をとる店も開いてません。かろうじて搭乗口近くにスタンドコーヒー店が一軒開いていましたので、モーニングにありつきます。

そのうち、ほかの店も開いてきましたので、搭乗時間までブラブラとウインドウショッピングをします。色彩感覚のよい「Love New York」と書かれた布カバンや組立て飛行機のおもちゃなどの小物をチョコチョコと買いました。もう少しこの場にいたいのですが、時間とは無情なもので、搭乗開始です。ファーストクラスから順番に乗り込み、定刻の出発です。今や見慣れたニューヨークの摩天楼やイースト・リバーを下に見て、やがて雲に隠れて見えなくなってしまう時、「勝手知つたる」ニューヨークへまた来たいものだ」と思いました。

途中のデトロイトは晴れていました。飛行機の乗換えのために二時間ほどありますので、空港内をブラブラし、この国最後の土(コンクリート?)をよくく踏みしめておきました。やはり、国際線はジャンボ機です。珍しく定刻の十三時出発です。いよいよ本当にこの国ともオサラバです。もうこの国に降りることはないので。事故でもない限り…。今から約十四時間のフライトです。シートベルト着用のランプが消え、クルージング飛行に入ったところで、機長から機内放送がありました。スチュワーデスは笑って

いるのですが、聞き取れませんでした。なにしろ、ボンボンツとしたこもった声です。ただでさえ聞き取れないのに、それに輪をかけています。

いつも思うのですが、機長の機内放送を聞き取れたら、英会話については大丈夫だと思えます。なにしろ、「私はしゃべるから、聞けるものならドウゾ」と言っているように聞こえます。とても、「私はみんなに聞き取ってもらえるようにしゃべるから、どうかみなさんよく聞いて下さい」という態度ではありません。みんなに聞き取れるようにしゃべらなかつたら、緊急時にはどうするのでしょうか。必ずしも、その国のスチュワーデスが乗っていて通訳する(できる)状態であるとは限りませんしネ。

それはともかく、妻も「何て言ってるの？」と聞きます。「分からない」と言っていると、幸いにも、もう一度放送がありました。部分的に聞き取れないところがあります。乗客をリラクセスさせることも兼ねて外人特有のジョーク混じりの放送をしているようです。「この機は、十四時間という長時間ノンストップ飛行をするので、二組のクルー(機長と操縦士等のチーム)が乗っています。オフのクルーのメンバーが休養のために、客室へ行くことがあるかもしれませんが、もう一方が操縦していますので、ご安心下さい」ということのようにです。それと、「飛行ルートは、アラスカく北極圏くアリユ

ーシャン列島を南下して関空へ行く」、「関空の天気は晴、気温は…」ということのようです。別に、聞き取れなくてもいい内容でした。イヤ、重要というか必要な放送をしていたのかもしれませんが、妻は、それを聞いてから窓の外の景色を見て、「あれ雪やね」と言います。まだカナダ上空だと思うのですが、地面にはかなりの雪が残っています。夏になっても解けそうにない霧囲気もします。

今回の旅は、往復とも「昼間飛行」になつてしまいました。ヨーロッパ線はご存知のとおり、「夜間飛行」が多いようです。ベルリンの壁が崩壊した直後の一九九〇年一月に、たまたま仕事でドイツ(カッセル市、ウオルフスブルグ市など)へ行った時もそうでした。往路は、南回り線でした。

香港やイスタンブールくウイーンの夜景は何ともいえず美しいものでした。ルフトハンザ航空機を利用したのですが、香港へは、燃料補給と機体整備のために一時寄るのです。真夜中の十二時頃に、「百万ドルの夜景」というだけあって、非常に明るくて、飛行機が旋回して着陸していく時には不夜城の世界へ吸い込まれていくようでした。また、空港の滑走路や誘導路のランプも青、黄、緑、オレンジ、ピンク…ととてもカラフルで、この世のものとは思えないほど美しいものでした。

イスタンブールからウイーンにかけて

の夜景も、ちよつとオレンジ系の暖かい落着いた色合いでホツとするものがありました。「どの辺を飛んでいるのかな」と思うと、うまいタイミングで「間もなくウイーン上空です」などの機内放送がありました。道路のナトリウム灯が放射状に、あるいは直線状に延びているのがよく見えます。放射状の中心がウイーンなのでしょう。「夜間飛行」ですから、よく眠れます。ときどき目が覚めて、「どの辺やる？」なのです。

復路は、北回り線でした。夜に向かつて突っ込んでいくフライトですから、フランクフルトを夕方に飛び立つて、間もなく日が暮れ、辺り一面闇夜の世界となります。東欧諸国の上空を飛んでいる時も、何処だかは分かりませんが、美しい夜景がたくさん見られました。極めつけは、旧ソ連のレニングラードの夜景です。「間もなくレニングラード上空です。この夜景は世界一ですので、ご覧下さい」の機内放送があり、下を見ると、暖色系のウイーンなどと対照的に、冷たそうな真っ白い大きな夜景が目にも痛いほど飛び込んできます。コンビナートの水銀灯を中心とする夜間照明でしょうか。でもそれはそれで、いつも飛んでいるスチュワーデスが、多少の主観はあるにせよ、「世界一」と言うだけあって、美しく、見事なものでした。「もう少しよく見よう」と身を乗り出した時です。大柄なルフトハンザ航空のス

チュワーデスが、情け容赦なく窓を閉めて回ってきたのです。「どうぞ見てください」と言つて舌の根も乾かぬうちにスグです。生殺しいいいところです。でも当時は、軍事上の約束で、民間機といえども、ある一線を越えたら、夜間にルームライトをつけて飛行していれば、攻撃を受け、撃墜されてもいたしかたなかったのです。そんな昔の「夜間飛行」のことを思い出して、「今回は残念ながら実現できなかったが、妻にも一度見せてやりたいものだ」と思いながら、外を見ていると、ルフトハンザ航空ではなく、ノースウエスト航空のスチュワーデスがやってきて、なんと、あのときと同じく「窓を閉めて下さい」と言います。私は、「ウソやろ?」と思い、思わず「ここはソ連上空か?」と聞きそうになりました。単に、時差ボケ防止の「睡眠タイム」であつたのだろうと思います。「昼間飛行」でも窓を閉められると、やはり心が落ち着くというか、そういう気持ちになります。

ネデイーンの結婚式のためになんの準備もせずに、本当に、普段着のまま電車に乗る感覚で、彼女の「気持ちだけでうれい」という日本流の言葉をそのまま真に受けて、ご祝儀やお祝い品も持たずに、ノースウエスト航空に飛び乗り、あわただしく過ぎたこの一週間。妻の「本当によかつたネ」、「また来たらいいネ」という言葉にも現実味があり、実感がこもっています。窓を閉めた効果はてきめ

んで、二人とも眠くなってきました。

…軽いシヨックとブレーキの音とともに、通勤電車は丁R京都駅に着きました。暖房の入った電車の中で朝からウトウトし、もう半年前となってしまった米
国旅行を思い出していたようです。走馬灯のように、いろんな人や場所が出てきました。懐かしい思いで一杯です。今でも、このまま隣のホームに止まっている
閑空行きの特急「はるか」に乗って行け
そうです。できれば今度は「夜間飛行」
で。

(完)

キャッチー&トレンド

大江 雉鬼

いきなり中身の見えないカタカナ標題を掲げてしまい恐縮至極。とはいえ今回のテーマを考えると、標題に与えられた役割は本文の主旨をわかりやすく代弁することではなく、強い印象だけ（たとえばそれがハリボテであっても）を残すということなので致し方ない。というのも、今回取り上げるのは、テレビや雑誌あるいはネット界限でよく出会うのに、意味するところが顧みられていない、そんな言葉が最近が目立つということだからである。要するに、中身より見てくれの印象が優先される昨今の風潮を、言葉の方面より考察してみようということである。典型的な事例として科学技術の分野を取り上げよう。当方は専門の学者でもなければサイエンスライターでもないの
踏み込んだ議論はできない。それを予めことわった上での物言いだ
が、本来なら厳密な定義づけが求められる用語が一般ニュースで取り上げられるとき、いい加減な使われ方になることが多い。その最たるものがAIである。以前にも取り上げたことがあるが、どのようなプログラムをAIと定義するのかというところをすつ飛ばしておいて、なんでもかんでもえーあいえーあいと連呼するのが最近の風潮のようだ。学習と推論によって最適解を導くプログラムというだけでも、不

十分ながら一応は定義っぽくなるのに、そうしたレベルさえ無視して高度で複雑な情報処理を行うもの、もつといえは高性能アプリケーションを十把一絡げにAIと呼んでしまうものだから、あらゆる局面において「AIを活用して」というフレーズの跋扈を許してしまう。

これは、AI＝人工知能という言葉それ自体が来たるべき明るい未来を象徴するものであり、多くの人々にとって耳障りがいいと思われるからだろう。そこには、AIと呼ぶのが適切かどうかを問う以前に、まずはAIと呼んでおけば注目される、ひいては商品が売れるという嫌らしさも透けて見える。この耳障りのよさが「キャッチー」に他ならない。キャッチーとは、元来は音楽の分野で大衆受けしそうなメロディーを指して使われた言葉らしいが、使い勝手がいいからなのか、いろいろな分野に転用されるようになった。そして、そうしたキャッチーによって作られていくのが、時々の流行、すなわちトレンドである。

このAIをめぐるキャッチー&トレンドとそっくりの現象が、最近「量子コンピュータ」の周辺でも起きている。量子論の知見を活用することによって従来のコンピュータの計算速度を遥かに凌駕するといった形で描かれるのが量子コンピュータであり、理論的には可能らしい。専門家による研究は一九九〇年代からさかに行われていたが、二〇一一年にカ

ナダの企業が「量子コンピュータ」と銘打ったシステムの販売を始めたことにより、この言葉の周辺はやたら賑やかになってきた。専門領域に踏み込まない一般人の感覚に立てば、アニメやSFの世界でしかお目に掛かることのない近未来の万能にして超高性能のコンピュータ（言ってしまうえば夢物語だったもの）と同じ名前で呼ばれるものが現実世界に姿を現したわけだから、いろいろザワついてくるのはやむを得ない。しかし、AI研究が爆発的な進展を見せたとはいえ、人工知能という言葉が世の中に現れ始めた頃にイメージされたもの（たとえば鉄腕アトムやドラえもん）が目前に現れているわけではないのと同じように、「量子コンピュータ」という言葉を冠したシステムが登場したというだけで、アニメ的な万能コンピュータが出現したのではない。にも関わらず、「量子コンピュータを導入したサービスによって」云々といった宣伝文句は、すでに当方の小耳にも飛び込んでくるものとなっている。それが許されるくらい「量子コンピュータ」なるものは、世間的にはキャッチーな
だろう。

ところで、量子コンピュータの話が出てくると、一つ触れておきたいネタがある。それが「シュレーディンガーの猫」である。量子力学の核心にも触れる内容なので当方ごときの理解ではまったくついていけないのだが、内容が面白いので

紹介しておきたい。シュレーディンガーは、二〇世紀の前半に活躍したオーストリアの物理学者で、量子物理学の基礎を築いた一人である。量子のふるまいに関する有力な記述に、量子は観測されることで一つの状態に収束するというものがある。だがシュレーディンガーによれば、その記述が正しいのなら奇妙な現象が生じるといふ。それが、量子のふるまいに反応して毒ガスを発生させる装置と猫を一つの箱に入れた場合であり、観測によって一定の確率で量子の状態が収束する（結果的に毒ガスが発生するかしないかが決まる）のであれば、観測されるまでは二つの状態が重ね合わさっていることになり、それを猫の生死に置き換えると、箱を開けて観察者が中を見るまでは猫は生きていると同時に死んでいる云々。

正直にいうと、この思考実験が何を意味しているのか、私にはまったく理解できない。量子のふるまいに関する有力な記述に対する反論として提示されたということ、「生きていると同時に死んでいる」「猫があり得ないように、その記述には無理がある」という主張なのだと思うのだが、量子コンピュータ実用化のニュースが報じられた折、「0か1で表すのが従来のコンピュータであるのに対して、0と1が同時に重なり合う形で表されるのが量子コンピュータです」といった解説が何食わぬ顔で読み上げられていた。聞いている方はもちろん理解できないのだ

が、解説を読み上げているアナウンサーもおそらくは理解していなかったに違いない。もし仮に理解できているのであれば「生きていると同時に死んでいる」猫についても、正しい説明が行われるはずである。

量子物理学の分野においては、専門的に研究している人々が見ている世界と、われわれ一般人が見ている世界は明らかに異なっている。研究者たちは実験や理論で得られた現象を数学的にも整合性のある形で記述しようとする。そのためにも、厳密な定義が随所に求められる。それに対して、一般人はキャッチーな言葉に出会うと、それが本来は厳密な定義が必要なものであろうとなかろうとお構いなし、やたらその言葉を使いたがる。理系脳だの文系脳だのを持ち出すのは軽薄すぎるにしても、「AI」や「量子コンピュータ」といった言葉については、もう少し慎重に扱いたいものである。

最後に蛇足をひとつだけ。「量子コンピュータ」とは何ですか？と問われた時の答え……、従来の古典コンピュータが電気を動力としているのに対して、量子コンピュータは猫によって動かされる。ただし、どのような猫でもよいわけではなく、生きていると同時に死んでいる猫でなければならぬ。この条件が量子コンピュータの実現を阻んでいる……某ギャグサイトより。

孫ウオツチング (22)

福田 圭

お母さんが働きに出ようと葵君（弟、二か月、ペンネーム）の保育園入園を希望したが、鳥取でも抽選にもれ入園できなかった。将来の少子化を見越して保育園の増設が行われないためという。来年4月までの「待機児童」となる。葵君家族とそのお友達で、焼き肉を食べに行く。

オランダ人のお友達も含まれていて、英語が飛び交う国際的な焼肉パーティーとなった。英会話が一番不自由なのが、私こと「お爺ちゃん」である。両親が焼き肉を食べている間、葵君を抱いていると、スヤスヤと眠ってしまった。首は未だすわっていない。十四キロの光君（兄、二十四ヶ月、ペンネーム）と比べると、その軽いこと。だが、「命の重み」はずっしりと重い。瞳のかわいい赤ちゃんである。

焼き肉を食べ終わり、アイスクリームを食べて家に帰ると、保育園から光君が帰ってきた。葵君はスヤスヤとお昼寝している。弟にお母さんをとられてストレスをためている光君をお父さんとお散歩に連れ出した。コスモス、彼岸花があたりこちに咲いている、一面畑の散歩道である。川原を眺め、蓮の葉、ほうずきにもお目にかかった。真っ赤な彼岸花をバツクに光君の写真を撮った。都会で育つのと自然豊かな「田舎」で育つのとでは、環境が大きく違う。子どもの育ちにどのように影響するのだろうか？

編集後記

秋らしくなってきました。季節の変わり目は、体調が変化しやすいです。

私は、お陰様で毎日歩いて、休日には六甲山へ登っています。継続は力なりと言いますが、私の体力も昨年にならぬ分強くなりました。十一月の吹田国際ふれあいマラソン大会にハーフの部でエントリーしました。

暮らしの基本は政治です。政治が暮らしを左右します。今の安倍政権は国民生活よりアメリカ追随大企業優先です。

消費税を上げて、軍備増強に使います。福祉は切り捨てられます。安倍政権が崩壊しそうなので「希望の党」が生まれました。「希望の党」は、自民党の党外派閥です。同じ穴のムジナです。

ダメされないようにしましょう。

今頼れるのは、立憲民主党・共産党・社民党だけです。今度の選挙には必ず投票に行きましょう。

憲



どう思う

敬老の日に参加して感じた行き届いた資料にびっくりと、身に迫っている感じを受けた。

高齢者の定義とは、六十五才以上七十五才以上という提言には、自分には関係ないと思いつつも息子が該当する年令である。

年齢支給時期が現代の六十五才以上から七十五才にされる恐れもありそう、単純なことは言えない。

十年前の六十五才の主人の姿と今の七十五才、八十五才、九十才、時代を考えると議論することも必要なかも知れない。体力の衰え、大切な記憶力ではさすが十年の差を否めない。

周りの人たちを見て思うことは、年令より若く見える人、年令以上十年を重ねたように見える人、一概には決められない。要はその人の考え方、毎日の過ごし方、自分に当てはめても、そう思う。結論はと言えば、「ウン??」が本音である。

私の四箇条

人によっていろいろと思うものの、自分なりに要約してみました。

- ・周囲に対して心配りが出来なくなっただけ。
- ・自分の行動が人さまの迷惑にな

つっていると気が付かなくなったとき。

- ・何事も自分本位になったとき。
 - ・最後は開き直り、正当化するとき。
- 私も、この一人なのでしようか。

踏み竹

時々思い出して、三十分ほど竹を踏みながら私の日課となった。足の血行が良くなるのか踏んでいると汗が吹き出てくるから不思議。

その一夜は、ぐっすり眠れるのだ。我が家の踏み竹は、実父の手作り、昭和四十年十二月六日、私の誕生日に、わざわざ持参してくれた。竹を踏みながら父を思い出す。

「ムリするなよ、少し枯らしてから作ったから大丈夫だよ」と言っただけ。晩も泊まることもなく後姿を見せて帰った姿が九十才を過ぎた今も、まざまざと目をかすめてゆく。

「竹の裏面に私が書いた文面」
丹波の父より頂く、軽くて踏みやすい。ギョツ、ギョツと足の裏を刺激する。嬉しくて涙、いつまでも我が父健在であれ」

形あるものは、いつか壊れるが、だからこそ今形あるものが美しくてならない。
亡父を想いつつ。

安ベエーのいやがらせ

「なんか臭いなア」…、又かと部屋に入ってみると、今朝カバーを取替え気持ちよく出かけたのに、その上に「ポツン」と黒い塊が。
「これ何よ」ひあー、安ベエーのうんこ」

一日ルスにすると嫌がらせのためか必ず汚す。のけ者にされたと思うのか、淋しさからか。知人に話したら「飼主が嫌がる場所を選んでするのだから頭がいいのよ」という。「そんな時、どうするの」

「もちろん叱るよ」
追いかけてこして思い切り、ゴツンと一発。
しまったと思うかもしれないけれど、叱られてもどこ吹く風、又出かけようとすると、後を追ってくる。そこが何とも言えぬ可愛い。



俳句

土田 裕

鶏頭のさまざまな色雨に立つ

国訛ぼろり出でたり衣被きぬかすき

秋鯖や味噌煮は妻の自慢にて

下校児の草の実付けて帰りけり

去りゆくは人のみならず秋の雲

影山 武司

子らの声戻る路地奥門火焚く

生身魂赤子に泣かれ笑みこぼすいきみたま

大樟の枝の広がり涼新た

縁側に日差したゆたふ初秋かな

薄日入る梁の奥より秋の声

鶏頭のぐんと伸びたる草の庭

分校の空飛び立てり秋燕

富士句会故石井弘子氏を悼みて
朝顔の白く澄みたり野辺送る
虫の音に遅れて替ふる暦かな
別れ蚊の羽音残せり闇の中